

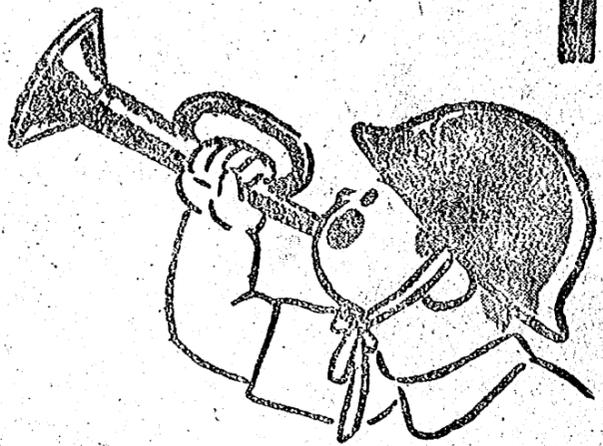
Title	東亜文化の再検討
Sub Title	
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学部研究室
Publication year	1944
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.38, No.7 (1944. 7) ,p.439(1)- 451(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19440701-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440701-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19440701-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 實費の子供の 子供保険の 危険

0歳より9歳



初年度より  
拂戻付  
保費料低廉

相 互 組 織

## 千代田生命

本 社 東 京 橋

三田學會雜誌

第三十八卷

第七號

### 東亞文化の再検討

野村兼太郎

世界文化の發展史上に占める東亞の地位は決して低いものではない。東亞は人類にとつて最も古い傳統を遺して  
る地域の一つである。一九二一年スウェーデンのアンダーソン博士に依つて北京の西南約三十七哩の周口店において  
發見された古代人類の遺骨は世界最古のものと同時代であるといふ。所謂北京支那人類(Sinanthropus pekinensis)  
といはれてゐるものがそれである。このことは黄河一帯のこの地方に甚だ悠遠の昔から人類の生息してゐたことを  
示すものである。勿論それが直ちにこの地方の文化發生を意味するものではないが、東亞の天地が世界最古の人類  
活動の舞臺の一つであつたことは明かである。

北京支那人類がこの地方に住居してゐた時代に人類がどの程度まで東亞に住居してゐたのか、又如何なる範圍に  
まで及んでゐたか、今は知る由もないが、極めて早い時代から人類が東亞の各地にその生活の根據を求めてゐたの

東亞文化の再検討

(四三九)

ではなからうか。舊石器時代の遺跡はシベリア・蒙古・滿洲・北支の各地において發見されてゐる。これらの人類の生活が極めて低度にあつたことは明かである。殊に水河の來襲も數回に亘つて起つてゐたやうであり、地殼の變動も少なかつたやうであるから、彼等の生活は決して安定したものではなかつたらう。これらの點については、こゝで詳論する必要はないし、又多くの研究も公にされてゐる。Hahnert de Terra, "Pleistocene Formations and Stone Age Man in China," 1941. & Peire Teilhard de Chardin, "Early Man in China," 1941. には要領よく記述されてゐる。

これら古い人類の生活と後の東亞文化と如何なる關係に立つか勿論明かではないが、それらの生活が地盤をなし、水い間に徐々に文化の曙光が現れ始めたのである。といつてもこれらの人類の子孫が必ずしもその後の文化の擔當者であるといふわけではない。ただ一つの文化の生成には單に外來文化に據る建設といふだけではなく、常に土著文化の發展を基礎とする必要があることを指摘せんとするのである。

東亞における最も古い文化は黄河の流域に發展した。何故に最初の文化がこの地方に先づ起つたのであらうか。勿論この問題は容易に解決し得るものではない。單に一應の解釋を與へることが出来るに過ぎない。あらゆる人類文化の發生地が河川の沿岸にあるといふことが、この場合も適應されよう。放牧から牧畜へ、さらに農耕へと發展して、過程が認められれば、河川沿岸がそれらの經濟生活に最も適當であることは明かであらう。耕作技術の上にも、交通の上にも、従つて又他文化との接觸にも河川が大きな役割を占めてゐることは否定し得ない。しかしそれならば今日黄河流域よりもさらに適當と思はれる南方揚子江沿岸に何故に發生しなかつたのであらうか。氣候風土の状態はあまり短い期間には殆ど變化らしい變化も示さないが、長期に亘つて觀察すると、そこにかな

り大きな變化がみられる。殊に初期にあつては相當顯著な變化があつた。東亞に文化の興り始めた頃には、揚子江一帯の地域は今日よりも遙かに濕地帯で、原始林が鬱蒼と繁茂してゐたことである。従つて人類の生活にはあまり適してゐなかつたと考へられる。勿論當時にあつても沿岸地帯に、殊に海邊には原始民が住居してゐたらうが、それらの生活程度は極めて低かつた。故に南方よりも北方の方がより早く開發され得たと推定される。

さらに北方の原始民は早くから西方の他種族と接觸し、その文化的影響を受けてゐたことも考へられる。東西兩文化が接觸したことがあるといふのも、勿論文書のない時代であるから、直接確たる證據があるわけではないが、新石器時代より末期にかけて、河南・奉天・甘肅・青海附近から石器と共に多くの彩色土器が發見され、それらはロシア領トルキスタンのアナウの出土品とか、南ロシアのトリポリエ、メソポタミア平原のスウッ、印度のモン・ジョ・ドロ・ハラッパの土器等に類似性をもつてゐることから、何らかの文化的交流が考へられるのである。ある民族が違つた民族と接觸し、その異種文化の刺戟を享受することは、その文化の進展に重要な因由を作る。北方の住民が早くから西方の異種文化と接觸する機會があつたとすれば、その刺戟に依つて南方よりも早く高度の文化に達し得たといふことは容易に推測し得ることである。

黄河沿岸に文化の發生し始めた頃、すでに東亞各地に人類がその生を營み始めたのであらう。彼等の生活は恐らく極めて原始的であつたらう。しかし兎に角そこに生の營みが始まると共に、東亞の自然的諸條件に適應し、その生活を向上させんとする人々の努力が始まり、東亞独自の生活様式が創られた筈である。このことは大陸においては勿論、東方及び南方に散在せる島々においても、その努力が開始されたのである。それらの努力はいふまでもなく記録に遺されたものではない。所謂考古學的遺跡遺物として後世に傳へられたものも極めて一小部分に過ぎない。

しかしそれら人類のなした努力は全然湮滅してしまつたわけではない。あるものは後世の土俗のうち、又は言語のうち、さらに幾多の傳説のうち、その痕跡を遺してゐるのである。

最も早く高度の文化を建設した北支にしても、その所謂三皇五帝傳説の如きは勿論後世の假託であらう。三皇とは天皇・地皇・人皇(秦皇)であるといひ、又伏羲・神皇・燧人であるといふ。五帝は黄帝・顓頊・帝嚳・帝堯・帝舜となすのが普通である。恐らく後世の五行説の影響の下に作られたものであり、實在せるものではない。さらにその後の夏殷周の時代になつても、幾多の傳説的記述や後世の附加物が混入して、どの程度まで現在せる事實とみるべきか、極めて困難である。しかしこれらのものを構成するに至つた基本には過去の事實が存在するのであり、假令それらのすべてが人間の頭腦的産物であつたとしても、思想そのものが元來事實を反映して生じたものであるから、これらを分析検討することに依つて過去の事實を幾分なりとも明瞭になし得る筈である。勿論このことは必ずしも傳説時代についてのみでなく、その後文書記録の確證ある場合でも同様である。一般に考へるやうに簡単に事實として認めることの出来ない場合が少くない。殊に東亞經濟史の研究においては多くの土俗・風習の検討が役立つ、かつそれには極めて處女地であるだけに周到な用意が要求される。

東亞に於ける文化の發展がかく古く、しかもその以後繼續的に發展して今日に至つたのであるから、その文化發展の過程においても、西洋におけるそれと自ら異なるところのものが存する筈である。然るに従來東亞におけるこれら發展史の研究は、歴史研究が支那・日本等においてかなり高く評價されてゐたにも拘らず、未だ甚だ不十分である。少なくともその方法において缺くるところが頗る多い。近世に至つて西洋史學の移植に依つてかなりの學的進展をみたことは疑ひないが、未だ東亞の資料を十分に検討し、そのうちから發展過程の本質的なものを十分に理

解し得るに至つたとはいひ得ない。西洋における史的發展の東洋への模倣的適用がなされてゐるに過ぎず、東洋自體の獨自性をわれわれ自身に依つて明かにしたものは未だ創られてゐない。

もとよりこのことは容易な業ではない。一朝一夕に完成されようとは思つてゐない。しかし東亞の指導國をもつて自ら任じてゐるわれわれにとつては、當然な事なればならぬ仕事である。東亞の文化が如何にして形成され、如何に發展し、如何なる特質を有するかを明かに知ることが、將來東亞文化を指導する基準を與へることになる。殊にその經濟形態を明かにし得て始めて妥當なる經濟的指導を可能ならしめる。今までの日本の學問はその意味であまりにも自己の身の廻りを構はな過ぎたのである。

## 二

東亞といふ名稱の地理的限界は必ずしも明瞭ではない。アジア全體についてみれば、世界の陸地の約三分の一、一千七百萬平方哩を占むる廣大な地域であり、ヨーロッパの三百八十一萬平方哩に比較すれば、ほぼその四倍半に匹敵する。東亞はその東半分とするも甚だ老大である。支那及び印度を含み、その東方諸地域を東亞と稱するのが妥當であるかも知れないが、こゝでは研究の對照を支那大陸及び東方・南方の諸島に限定することとする。東亞の文化の主流はそれらの地方の環境を背景として創り上げられたものである。

東亞の文化を構成する自然的要素としては二つの面が認められる。一つは大陸的風土であり、他の一つは海洋的又は島嶼的風土である。

アジアの面積は廣大ではあるが、その多くは高原地帯である。中央に世界最高の高原地帯があり、その高原が東西に連續して延びてゐる。パミール高原から東方へ、西藏・新疆・蒙古の大高原が連なり、その大部分は大沙漠地帯

である。これらの高原地帯には、ヒマラヤ・カラコラム・崑崙・阿爾金・祁連等の諸山脈が東西に走り、その餘脈は延びて支那内地に入り、所謂北嶺・南嶺の諸山脈を作つてゐる。パミール高原の東北の方には、葱嶺・天山・アルタイ・杭愛の諸山脈が走り、いくつかの區域に大陸を分かつてゐる。その結果自ら各地の交通——文化の交流を阻んでゐる。中央から四方に流下する河川すらも多くは外海に出ることが出来ず、各所に内海を形成してゐる。ただ支那の平原地帯を流れる黄河・揚子江、シベリアの平原地帯にあるアムール・レナ・エニセイ・オブ等の諸川が人類文化に大きな役割を演じてゐることは看過し得ない。

老大な大陸の大部分が温帯に屬してはゐるが、暖流の關係上北米・ヨーロッパに比較して気温は低い。山脈と山脈との間を通じて西と東とをつなぐ幾筋かの道路は、東西それぞれに發展していつた異種の文化を繋ぐ重要な役目をもつてゐたのであるが、なほかうした地勢が東亞には東亞独自の文化を生ぜしめたことは當然であらう。

この大陸の東から南にかけて連なる日本及び南洋の諸島は、大陸内地とは全く異なつた生活様式をもつことは自然である。日本を除き他の多くの諸島が熱帯に位し、そのために特に衣食住に依つて刺戟さるることは少なく、文化發展の機會に乏しかつたとみられるが、貿易風のやうな特殊の刺戟があり、そこに海洋民族としての独自の生活が營まれたことは認め得よう。渺々たる大洋を日常眺めて暮してゐた人々の間には、同じ東亞の天地とはいへ、大陸の同胞とは全く異なつた生活様式と生活意識とをもたざるを得なかつたらう。

この二つの自然的要素はそれぞれ違つた地域を支配してゐるのであるが、人類の文化の交流はある程度まで兩者を混淆させる。殊にその點において日本の文化の如きは最も注意に値するものである。

東亞の文化がその自然的環境から大きく影響されてゐることはこれを否定し得ないが、その文化がすべてそれに

依つてのみ創られたと考へることは出来ない。自然が人類の生活を制約することは必然であるが、人間がその自然の制約を受け容れる致方には種々様々のものがある。その受け容れ方の如何が人類の創る文化にそれぞれ違つた形式を與へるのである。かつその自然の制約の相違も極めて複雑である。換言すればその地方差には甚だ大なるものがある。例へば同じ支那内地だけをとつても、南支と北支とは勿論、中支ともそれぞれ甚しく相違する。單に北支・中支・南支と違ふばかりでなく、同じ北支の間にあつても少なからざる地方差がある。かく自然的差違が大であるところに、これに對する人類の對策が又相違するのであるから、それから生ずる文化様式は細い點になれば甚だしく複雑な、かつ微妙な差異を生ぜざるを得ない。

それにも拘らず、こゝに特に地理的・風土的影響を概括的に問題とするのは、それらが根本的に人類の生存を制約するものであり、かつ同じ地域における自然的諸條件が人類の生活にほほ同じやうな影響を與へ、共通の特徴を示してゐるからである。微細な點において幾多の差違があつても、本質的傾向において類似性をもつことが多いのである。この意味において東亞文化の發展を明かにする場合にも、東亞を構成する地理的、自然的諸條件を明かにする必要があるといふのである。

自然的諸條件を明かにするといふ意味は、單にそれらの客觀的知識を究明するといふだけではない。それらとこの地方の住民との諸關係を明かにしなければならぬ。地域的な自然條件がその地域における人類に如何なる形態において受け容れられてゐたかを総合的に觀察することは、單に地理學的考察に止まらず、人類學的、民俗學的、考古學的、言語學的な諸考察の援助を必要とする。

東亞における民族構成は簡單ではない。しかし主要なる文化擔當者を考へれば、自ら南方系と北方系とに分かつ

ことは可能であらう。

通常南方系諸民族のうち算へられる主要なるものは、(一)支那族、(二)交趾支那族、(三)西藏緬甸族である。支那族は所謂漢民族を中心とするものであり、東亞文化の最重要の擔當者であつたことはいふまでもない。交趾支那族は史上に南蠻・閩越・南越・安南・交趾・南詔・大理・林邑・占城・真臘・暹羅(老欄)・暹羅等の諸國を形成した民族として現れ、それらの遺跡よりみるも、決して輕視すべきものではない。西藏緬甸族は史上には氏・羌・吐蕃の名を以つて現れてゐるが、西藏・ネパール・ブタタン・シッキム・アッサム・緬甸等の國々を形成した民族である。この外文化の程度の著しく低いものを算へれば、なほ多くの南方諸族を擧げられるであらうが、東亞文化の進展に直接關係あるものは以上のものであらう。

北方系諸民族中主要なるものは(一)ツングース族(二)蒙古族(三)土耳其族であらう。その外フィン族・サモエド族その他幾多の小種族がある。ツングース族の主たるものはシベリア・滿洲にあり、肅慎・挾餘・高句麗・靺鞨・渤海・女眞・金・清等の國を樹てた。蒙古族が元を建て、又西方に發展したことも周知のことであり、土耳其族は元來支那の西邊からトルキスタン地方にあり、かつて大月氏として東亞文化に密接な關係のあることもよく知られてゐることである。

日本民族が南方系に屬するか、北方系に屬するか未だ明確でない。元來大陸の東に長く列る島國であり、多くの民族の結合から成り、その文化も南方系・北方系兩者の影響を受けてゐる。民族の根幹をなすものは北方系民族と考へられようが、元來島國として特殊の發達をなしたのであらう。従つて言語の如きも多くの影響を受け、そのために俄かにその歸屬を斷定し得ないような状態にある。かゝる特殊の状態にあることが又その東亞文化史上における地位に特殊の意義を附與するものと見るべきであらう。

これら東亞を舞臺として活躍せる諸民族が元來その地理的環境に影響されて各自の文化を形成したのであるが、他方相互の文化的交流と彼等自身の傳統とに依つて、そこに複雑な文化構成をもつに至つたのである。われわれが東亞文化史を檢討するに際しても、出来る限りその構成を分析すると共に、その傳統の源流を探究する必要があるのである。殊に東亞各地における文化の交流を十分に檢討することが必要であり、それに依つてわが日本文化の構成をも今よりもつと科學的に明かにすることが出来ると思はれる。

經濟的發展の面からみる時には、大體三つの部分について考察するのが適當であると考へてゐる。即ち北方における牧畜を主とするもの、中央における漢民族を中心とする農耕文化の發展、南方においては、海洋における活動を主とした漁撈文化がそれである。勿論それらが常に同一業務に停滯してゐたといふわけではない。それらの各文化の交流は各自の經濟生活を複雑化し、發展していつたのである。この間にあつて日本は中央の農耕文化と南方の漁撈文化との影響を最も強く受けてはゐるが、他方前述せる如く民族的には北方の影響が強く、そこに特異の文化構成を成就したものであらう。従つて第四の研究範圍として日本を中心とする部分を認むべきであらう。

### 三

西洋の文化發展の眼を以つて東亞における状態を觀察し、東亞文化の停滯性又は後進性を云々する者もある。殊に經濟的方面においてそれらの發展が遅々たるものがあつたために、一層さうした考へ方が行なはれがちである。しかし西洋的發展のみが人類發展史上の唯一の政方でもなし、又それだけが正常のものと考へることも正しくない。東洋における人類の文化史上における寄與は西洋におけるそれに劣らず、又それと違つた「ものゝ見方」も成立し

得る筈である。元來西洋文化の近代的發展はむしろ東方文化の刺激に基づくところ頗る大なるものがある。

他方において東洋文化も西洋文化と著しく異なる面をもつてはるるが、古くから全く別個に發展したものでない。東亞における文化の發展をみて、それは常に孤立的なものではなく、西方文化との關聯をもちつゝ發達したものである。支那の歴史に現れて来る多くの民族のうちには、今日なほ十分にその素性を明かにし得ないものが少くない。殊に支那と西域地方との關係は早くから生じ、そこに未だに明白になし得ない諸民族との交渉がある。白鳥博士・藤田博士等のこの方面に關する價値ある諸研究に依つて多くの點が明かにされてゐるに拘らず、なほ不明のところが少ない。西方文化との關係は所謂アジア的なるものを明かにする上に頻る重要である。

西方文化との接觸のうちで、近世西洋資本主義の東漸ほど重要なものはないことは周知のことである。それは東亞における經濟生活を根本的に變革するものであつたからである。東亞の天地を唯一の世界としてそこに生活の基を構成してゐた東亞の諸民族は決してこの新來の勢力を歓迎しなかつた。違つた文化様式をもつ兩者の交流は必ずしも幸福なもののみであつたとはいひ得ない。西洋文化の齎した個人的自覺は東亞においても從來の政治形態を打破しなければ止まなかつた。東亞は古き秩序を棄て、新しき秩序を樹立しなければならなかつた。このことは永い傳統をもつ東亞の諸民族にとつてさう容易なことではなかつたのである。このことから生じた東亞文化の混亂は今日と雖もなほ續いてゐるといつてよい。あらゆる方面において未だ解決されざる問題が残つてゐるのである。

強力な西洋文化の影響の下に、殊に經濟力の壓倒的な強さに依つて、あらゆる方面に改革を餘義なくされた東亞諸民族は全面的に西洋模倣に依つてその生活を切り替へるが、又はその經濟力の下に屈服するか、その何れかを選ばなければならなかつた。模倣は常にその文化を弱體化する。創造力を失つた東亞民族の生活は全面的に西洋的

なるものへ屈服せざるを得なかつた。しかし永き傳統をもつ民族の力はそのまま消滅し終るものではない。

東亞の文化は西洋文化のもたざるものをもつ。西洋的「ものゝ見方」のみが唯一の見方ではない。ただその壓倒的な物質的勢力に依つて眩惑された東亞民族は自己本來の姿をすら見失つたのである。近世的合理主義、個人主義的利己主義の發展が現代社會に大きな寄與をなしたとしても、それはすでにあらゆる方面において行詰りを生じてゐるのである。それらを打開しやうとする非合理性の強調はすでに現れてゐる。東亞における「家」「國」などの問題は新しい角度から見直す必要があるのである。

われわれは西洋文化を一概に排除することは出来ない。そこに生じた合理的な科學の發達はこれを包容しなければならぬ。もとより科學のもつ限界は十分認識すべきであるが、同時にその方法を利用し、われわれの祖先の創造した文化の本質を把握しなければならぬのである。數千年來の傳統をもつ東亞文化には容易に棄つることの出来ない偉大なるものをもつてゐる。西洋文化を受け容れるのは本來の文化をより高度に引き上げるために過ぎないのである。西洋の文物をそのままに輸入して、その形骸を模倣せんがためではない。この點において東洋文化の發展を斷つてゐる必要は今日におけるほど急務なるはないのである。

東亞における偉大なる文化の擔當者は漢民族であつた。その發展の經過は一見停滯してゐるが如くみえる。しかし北方黄河沿岸に起つたこの民族の文化は次第に周圍に同化作用を起してゐる。幾度か他民族のために征服されたが、却つてそれらの民族を包容し、同化しつゝ、強力にその文化を發展させていったのはこの民族である。包容力は極めて大である。東亞文化の中心として支那文化の檢討批判は先づ最初になされなければならない。しかしそれは單に從來なされてゐる所謂支那學の程度であつてはならない。支那文化の再批判は單に支那文獻の再検討、歐米

人のなした支那學の研究以上は、われわれ自身の眼を以つてなされなければならない。かつ又それは東亞全體との  
聯關の下になさるべきである。

支那文化の大きな影響の下に育成されていった日本文化は特殊の意義をもつものである。このことはすでに上述  
したところでもある程度まで理解されようが、日本民族のもつ特殊の地位に關聯するものである。外來文化を常に  
全面的に攝取する點においては、東亞における他民族の比ではない。かつて支那文化を全面的に受け容れた日本民  
族は西洋文化をも同様に攝取した。しかし常にそれで満足はしなかつた。一度包容した文化を結局自己のものにす  
るまで不斷に努力する。かつその祖先が支那文化を攝取した時にも、又西洋文化を受容した場合にも、これを自己  
のものとなし得る程度の理解力をもつてゐた。支那のものを理解し得ると、同時に西洋のものも理解し得るのであ  
る。この點において日本民族ほど大きな包容力をもつ民族は少ないといつてよからう。

勿論その長所は時に短所となつて現れることを免れない。唐に心酔し、西洋に歸依し、日本自身の文化を忘却す  
ることさへ起つた。しかしかゝる包容力をもつことは東亞文化の擔當者としてその將來性の極めて大なることを意  
味するのではなからうか。日本が東亞史上のみならず、世界史上にもつ大きな役割はこの包容力とその上に立つ創  
造力とに依つて決定されよう。この意味において日本文化の再検討が必要とされる。それは東亞諸民族との關聯に  
おいて検討すると共に、日本文化自體のもつ本質を究明せられなければならない。いふまでもないが、こゝに文  
化といふのは單に文物藝術のみをいふのではない。その民族のもつ生活様式全體を指すのである。この點において  
はわれわれ自身についても未だ検討せられざる分野が頗る多いのである。

(この一篇は東亞經濟史の研究の急務を論ずる目的を以つて執筆したのである。私自身としてはこの後にそれらの  
研究方法について具體的に論及する計畫であつたが、時間の餘裕がなく、思ふ如く認めることが出來ない。單な  
る前文のみを以つて暫くその責を塞ぐのみ。讀者并びに編者の寛容を乞ふ次第である) 昭和十九年十月八日稿